

住民だけでなく、 来訪者も楽しむ「新浜」まちづくりを

この日は、沿岸部の2つのエリアからの活動紹介がありました。1つは宮城野区新浜地区。無農薬の田んぼで「メダカ米」を育てている遠藤源一郎さんからの報告です。

新浜地区は、集落規模は小さいものの「荒浜と似ているところが多い」という遠藤さん。半農半漁の生活や、すぐ近くに松林があって燃料や食料を調達していたこと、貞山堀からの恵みがあったこと等、暮らしぶりにおける共通点が多かったそうです。東日本大震災で大きく被災し、震災当初はあまりの被害の大きさに「新浜に戻って生活したい」という住民は少なかったそうです。しかし、2回目の町内アンケートでは現地再建を希望する声が高まり、当初県道10号線を境に設定されていた災害危険区域について変更を求める声を新浜町内会として仙台市に提出。仙台市はその要望を受けて、海岸線から1kmのラインよりも東側を災害危険区域とし、結果として集落の大部分において現地再建が可能となりました。

新浜町内会では復興まちづくりとして「ニュービーチ（新浜）プラン」を策定し、住民だけでなく、来訪者も新浜を楽しめるような集落にしていくことを目指しています。そして、東北学院大学の菊池慶子先生（日本近代史）や平吹喜彦先生（生態学）をはじめとした研究者の協力を得ながら住民参加型の学習会を開き、

新浜が持つ地域資源の魅力を捉え直してまちづくりにつなげていこうと活動しています。住民の皆さんも「新浜にこんなに歴史があるとは知らなかった」と、学習会をきっかけに改めて自分たちが住む地域の歴史や資源に気づいているそうです。また、「よそから来た人に地域のことをほめられると嬉しい!」と、新浜に誇りを持つことにもつながっているようです。

この日、遠藤さんが示してくれた新浜地区のイラストマップには、吉窪神社や地藏堂といった大震災後も残った地域資源、そして、震災後に失われつつある浜辺の植物の再生を目指すエリアや貞山堀沿いのサイクリングロードといった「これから」の姿が描かれていました。

「**仙台市沿岸部は東日本大震災の津波被害によって、荒浜・井土・藤塚は集落の大半が災害危険区域となってしまう**。結果として、**新浜が海に一番近い集落になりました**。各地で復興まちづくりが進められている中で、**新浜においては暮らしの中に『海辺』を位置づけながらこれからのまちづくりについて提案することができます**。利活用事業でも、そうした新浜のメリットを活かした提案を町内会として行いました。今後は、沿岸部同士で繋がったり、同じ志を持ってくれる団体と連携しながら、**新浜を盛り上げていきたいです**。」（遠藤さん）



震災前も、震災後も、 荒浜には活動があったことを伝えたい

続いて、若林区荒浜地区からの報告がありました。生まれた時から荒浜に暮らし、震災後は、流出した自宅跡地に「海辺の図書館」を設けて活動している庄子隆弘さんからは、「海辺が近くにある暮らし、松林が近くにある暮らしが当たり前だった」として、さまざまな自然の恵みを享受していたことが「荒浜での暮らし」として挙げられました。

大震災後に荒浜小・七郷中の同窓生で「HOPE FOR project」を立ち上げた高山智行さんは、「住民の皆さんの気持ちをつないでいきたい」と、毎年3月11日に荒浜小学校の校庭で花の種をつけた風船を飛ばすイベントを行っています。2012年は飛んでいく風船を眺めながら涙を流す人もいれば笑顔の人もいて、それぞれが気持ちの整理をつける場であったように思えたそうです。「どんな苦境であろうと、感謝の気持ちや相手を思いやる気持ちを持っているのが荒浜の皆さん」と高山さん。住民の気持ちを大事にした復興のあり方を考えていきたいと言います。

建築家の小山田陽さんはメモリアル交流館の展示設計をとおして、東北大学大学院で建築を学ぶ鈴木さちさんはせんだいスクールオブデザインをはじめとした大学のプロジェクトをとおして、荒浜に関わってきました。今回の利活用事業においては、高山さんとともに3人で、これまでの荒浜での経験を踏まえた「参

加の仕方」と「荒浜で残すもの」についての提案を行ったそうです。

「参加の仕方」では、利活用事業が十分な話し合いや周知がなされないまま進められる可能性があること、そして現在知らない・興味がない人が今後参加する余地を残しておきたいことから「段階的整備」を提案しました。また、荒浜は現状では包括的組織（町内会など）がない一方で、荒浜に震災前まで暮らしていた住民や荒浜出身の若い世代、そして他地域から関心を持って関わっている人など、さまざまな層が震災後に荒浜にアプローチしていることから、「多様な参加主体」をしっかりと意識することも必要だと提案しています。

「荒浜で残すもの」については、地域の人が思い入れのある場所、行事、風景などを丁寧に整理し、それを継承または新たな形で生まれ変わらせる事を提案しました。

「震災後の荒浜にも様々な活動が生まれ、出来事が生まれたことを忘れてはならないと思います。そうしたことに関わってきた人が見過ごされないようにしてほしいと思っています。」（鈴木さん）

「『何を新しくするか』も大事だが、『何を残すか』も大事にしながらい活用事業が進められることを期待しています。」（小山田さん）

